

ひょうご 水百景

No.10 昆陽池（伊丹市昆陽池）

～行基が築造を指揮した多目的溜池、今は野鳥の楽園～

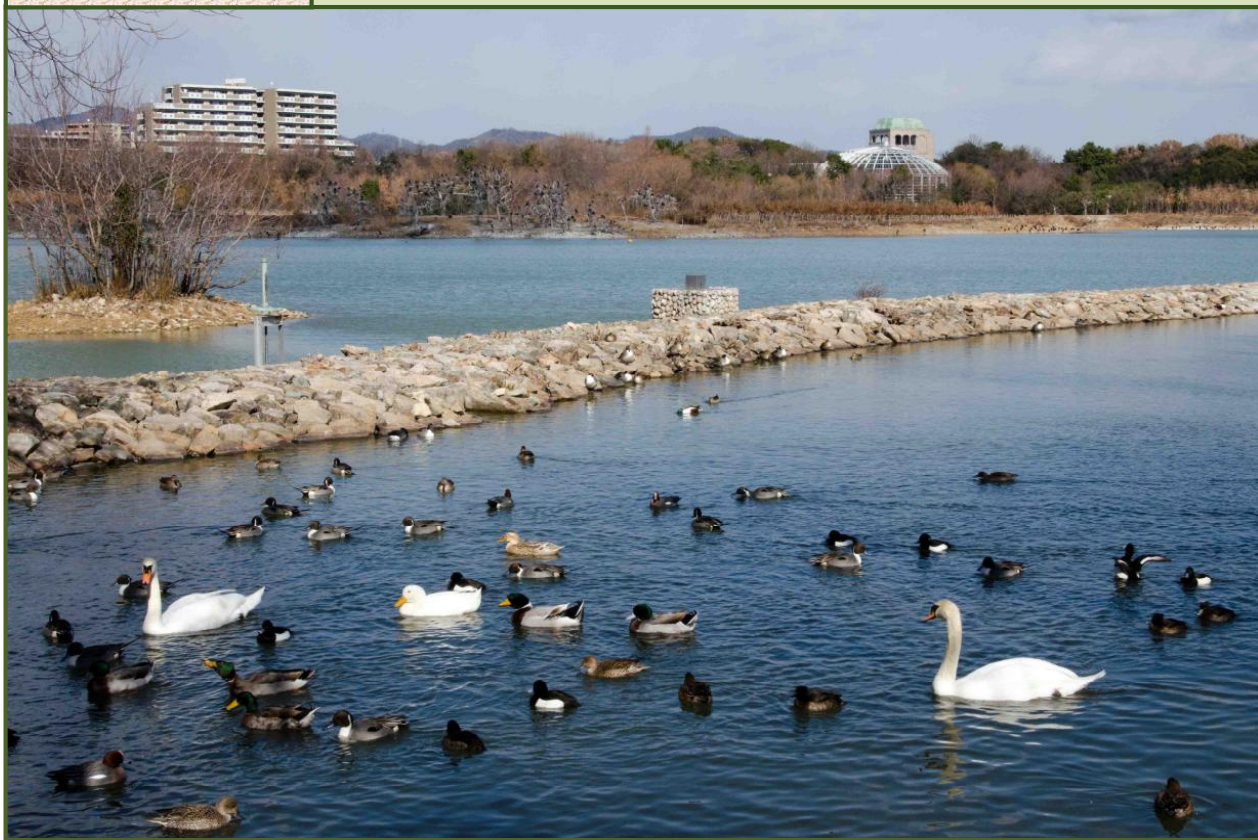


写真-1 昆陽池（手前が給餌池、前方のドーム状建物は伊丹市立昆虫館）（平成24年2月撮影）

■ 野鳥の楽園・昆陽池

伊丹空港から北向きに離陸した飛行機は、中国自動車道より南、昆陽池（こやいけ）と瑞ヶ池（すかいけ）より北、そして武庫川より東の狭い範囲を上昇しながら左旋回します。その時、飛行機の左側の窓から日本列島の形をした人口の島がある池が見えてきます。これが、渡り鳥の飛来地として有名な関西屈指の野鳥の楽園・昆陽池です（写真-1）。

奈良時代に築造された昆陽池。毎年9月下旬を過ぎる頃からカモなどの渡り鳥が大挙して飛来します。また、ユリカモメ（写真-7）やカイツブリなど多くの水鳥も見られます。公園を管理している伊丹市の方に話を聞くと、多いときは4～5千羽の鳥がくることもあったようですが、最近は千羽をきっているとのこと。

確かに、2月上旬昆陽池に行くと、野鳥観察橋の付近に餌を求めて多くの水鳥が集まっていましたが、せいぜい数百羽。伊丹市が飼育放養しているコブハクチョウ（写真-5）や、餌となる小魚を狙っているサギが数羽、それにキンクロハジロ（写真-3）やオナガガモ（写真-2）、ヒドリガモ（写真-4）、マガモなどのカモ類、ユリカモメが群れをなして泳ぎまわっていました。



写真-2 オナガガモ 上が♀ 下が♂



写真-3 キンクロハジロ

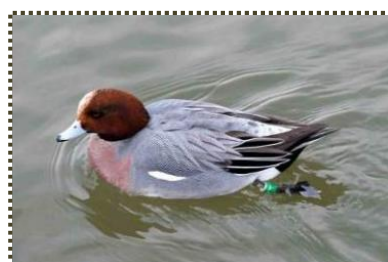


写真-4 ヒドリガモ



写真-5 コバクチョウ



写真-6 アオサギ



写真-7 ユリカモメ

■ 行基が築造を指揮したわが国初の多目的溜池

わが国で最初に建設された多目的溜池、それが、奈良時代、僧行基^{※1}の指揮の下に築造された昆陽池だといわれています。

武庫川と猪名川に挟まれた伊丹台地には、台地を横断する形で「昆陽池陥没帯^{※2}」という特異な地形があり、台地を南北に流れる天神川と天王寺川がこの陥没帯により流れを西に向け武庫川に合流しています。

利水面では、台地という地形上の理由から高燥で水の便が悪く、農民は水不足に苦しんでいました。

一方治水面では、洪水時に窪地である陥没帯に水が溢れ水浸しになる有様でした。

そこで、行基はこの地形をうまく利用して、陥没帯に池を築き、平時は北方山麓より流れ出る河水をかんがい用水として貯留し、洪水時には池を遊水空間として利用する、利水と治水の機能を併せ持った、いわゆる多目的溜池を築きました。これが昆陽池です。



図-1 昆陽池陥没帯周辺の地質図

(『兵庫県地質図(南部)』から引用・加工)

※1 行基：(668~749年) 奈良時代の僧。渡来系の氏族出身で天智天皇7(668)年河内国大鳥郡(現在の大阪府堺市)に生まれる。15歳で出家したが、当時の国家中心の仏教に疑問をもち、民間伝道をこころざす。摂津・河内・和泉・山城の国(現在の兵庫県と大阪・京都府)に49の寺院を建てたほか、信者の協力のもとに用水池や溝、道や橋、そして簡易宿泊施設である布施屋や、民のための寺である院をつくる。

伊丹では、昆陽上池など5つの溜池と2本の溝(水路)をつくったほか、昆陽布施屋(現・昆陽寺)を開き、多くの村人・旅人を飢えや病気から救ったといわれている。天平12(740)年から東大寺大仏の建立に協力し、天平17(745)年に朝廷より日本で最初の大僧正の位を贈られた。大仏造営中の天平21(749)年、菅原寺において81歳で入滅。朝廷より「菩薩」の称号が下され、行基菩薩と称えられている。写真-8は、県道東富松御願塚線(ひがしとまごがづかせん)沿いの御願塚古墳前に行基像。



写真-8 行基像

※2 昆陽池陥没帯：伊丹台地の中央部を横断している地溝的くぼみ。伊丹市役所の北約1kmの付近を、東北東-西南西に延びるこの特異な地形は、2本の断層運動によって落ち込んだ、いわゆる陥没型の断層帯である。幅約300m、長さは数百mにわたる。昆陽池東部の埋立地でのボーリング調査から伊丹礫層が約5m落ち込んでいることが確認され、比較的新しい時代(第四紀後期)に活動した断層であると考えられている。

■ 行基が築造を指揮した溜池群

安元元（1175）年に泉高父宿弥（いずみのこうふすくね）が記した『行基年譜』（行基の業績を年代順に記したもの）には、天平 13（741）年の記事に、昆陽上池を含む 5 つの池、2 つの溝が一括して記載されています。

5 つの池は、昆陽上池、昆陽下池、院前池、中布施尾池、長江池ですが、現存しているのは昆陽上池のみ。2 つの溝は、昆陽上溝と昆陽下溝で、昆陽上溝が昆陽上池につながる天神川、昆陽下溝が昆陽下池につながっていたとされる天王寺川ではないかとの説があります。

昆陽上池（現・昆陽池）は、昆陽布施屋（現・昆陽寺）が建てられた天平 3（731）年とあまり隔たらない時期に築造されたといわれています。

「文化 3（1806）年昆陽池付近絵図」（図-2）によれば、昆陽上池は、当時東西 500 間（≒900m）、南北 308 間（≒550m）の規模で、約 50ha の広さであったと推定されています。池の北側で、天神川が西に急カーブしている個所（現・大池橋直上流）から取水し、南側の一ツ樋、二ツ樋、茶屋樋から昆陽・寺本・池尻の 3 ヶ村に灌漑用水として配水していました。

昭和 36（1961）年に池の東側が埋め立てられ、約 3 分の 2 の大きさになっています。

その後、昭和 42（1967）年の異常渇水の教訓を踏まえ、武庫川の水利権（豊水水利権）を取得し、取り入れた水の一時貯水池を、昆陽池の中に設けています。

昆陽下池は上池の西方にあり、池尻・山田・野間・友行・時友の五ヶ村を潤していましたが、慶長 13（1608）年に池尻・昆陽両村の願いによって埋め立てられています。



図-2 文化3年 昆陽池付近絵図を加工

（昆陽池の案内板の地図を加工）



図-3 昆陽池周辺の地図：国土地理院地図(電子国土Webを加工)

この時、受益地である山田・野間・友行・時友の4ヶ村が反対して訴えを起こしています。代官の手で調整が行われ、武庫川から取水している昆陽井の水路が、下池からの水路の上を越す箇所（「大ゆりの樋」）で、武庫川から取水した用水の一部が下池水路に落ちる構造にすることで一応の決着をみています。

なお、他の3池（院前池、中布施尾池、長江池）については、その位置を特定できる資料がないそうです。

養老7（723）年に三世一身法が發布され、それまでの土地の公有制から、土地の私有化を一部認める方針へ転換されます。これは、食糧増産を目的として墾田を奨励するため、三世代までの墾田私有を認めるもので、これにより一時的ではありますが農民の開墾意欲が高まり、耕地の開発が加速していきます。

このような背景の中、溜池群の築造により伊丹台地の水利は安定し、開発は急速に進んでいきました。

■ 昆陽池を都会の中の野鳥公園に

昭和35（1960）年以降、高度経済成長の影響を受け、伊丹台地は農地の宅地化が急速に進み、昆陽池の管理にも支障をきたすようになってきました。そこで、溜池の保全と農業経営の安定化を図るため、池の所有権をもつ昆陽農協と伊丹市で協議し、昭和43（1968）年に「水利は従来通り」という条件で市が管理することになりました。

伊丹市は、兵庫県が「鳥獣保護区特別保護地区」に指定した昆陽池を、「都会の中の野鳥公園」とするべく昭和47（1972）年に5ヶ年計画をつくり整備を行いました。

高度経済成長期に人口が急増する中、池の東側が一部埋め立てられたものの、行政の努力によって水と緑の空間（公園面積=28.5ha）が開発の圧力から守られ、平成14（2002）年の市民意識調査において伊丹が全国にアピールできるものの第1位に昆陽池が選ばれています。

海や山をもたない伊丹市にあって昆陽池は貴重な水と緑のオープンスペースであり、野鳥ばかりでなく、多くの市民の憩いの場として親しまれています。



写真-9 昭和22年頃の昆陽池
（昭和23年に米軍が撮影した空中写真を加工）



写真-10 平成14年の昆陽池
（平成13年国土地理院空中写真を加工）

■ 野鳥の楽園のはずが……

湖面を埋め尽くすほどの野鳥の群れを期待して昆陽池に行きましたが、肩透かしを食った感じで、「伊丹市の鳥」でもあるカモをはじめ野鳥の数は思っていたほど多くはありませんでした。

減少の理由のひとつは、夏場のアオコ発生によりカモの餌となる水草が育たず、餌が不足するためとか。

伊丹市では、水質汚濁対策として、水鳥に餌を与えるための独立した池（給餌池）を整備し、水質浄化のために水生植物を植栽するとともに、池に注水している井戸水に含まれるリンや窒素がアオコ発生原因のひとつだとして、井戸水を浄化する水路を整備しています。そして今は、井戸水に代えて（井戸水は予備的水源）工業用水（淀川から取水）を注水しているそうです。



写真-11 カワウの群れとファン害で枯死した樹木

また、減少する渡り鳥とは対照的に、“日本列島”を占拠している数百羽のカワウがコロニー（集団営巣地）を形成していて、糞に含まれるリンにより樹木が枯死して問題になっています（写真-11）。

■ 定家が歌に詠んだ昆陽池

昆陽池のほとりに、百人一首の撰者として有名な藤原定家（応保2（1162）年～仁治2（1241）年）の歌碑があります。

建暦2（1212）年、定家が有馬温泉へ湯治に向かう途中、昆陽池のほとりを通ったときの情景を『明月記*1』で次のように記しています。

「先ほど降ったばかりの雨がやっとあがり、昆陽池には水が満ちて来た。天の恵みか、風もおだやかに吹き、今年も豊かな稔りを楽しむことであろう。遠くに見える松は、私を旧知の仲のようにやさしく迎えてくれ、群がる鳥は、人を驚かすように音を立ててわれ勝ちに飛び立つ…」

少なくとも平安時代の末期から、昆陽池には多くの鳥がいたようです。

（歌碑裏面の読み下し）
 昆陽池を過ぎて武庫の山に入る
 藤原定家
 新雨初めて晴れ池水満つ
 恩波風緩にして豊年を楽しむ
 遠松我を迎えて親故の如し
 群鳥人を驚かし後先を争う
 暁涙伴い来る江館の月
 春望相似たり 洞庭の天
 頭を廻らして遙かに顧る青巖の路
 漸帝都を隔てて山復た川
 「明月記」より

※1 『明月記』：定家が治承4（1180）年から嘉禎元（1235）年までの56年間にわたり克明に記録した日記。

■ モノローグ

平成22（2010）年3月に農林水産省の『ため池百選』に選定された昆陽池。目的のひとつである「灌漑機能」は、都市化により受益農地がかなり減少しているものの、その機能は残されています。ただ、天神川の取水樋門（伊丹市管理、大池橋下流のラバーダムでせき上げて、樋門より取水する仕組み）は、門扉の前に土のうが積まれていて門扉の開操作ができない状況、つまり使用していないようです。

一方、治水機能は、そもそもどのような仕組みだったのか現地をみてもよくわかりません。ただ、天神川左岸沿いにある水路が昆陽池に接続されているので、内水排除の機能はあるといえるかもしれません。いずれにしても、築造当時の機能は、時代の変遷とともに大きく変わってしまっているようです。

昆陽池は、古くから和歌や俳句に詠まれた有名な景勝地でもありました。池の周辺にはいにしへの歌人が詠んだ歌碑が13基あります。せっかくの機会なので、ほんの一部を紹介します。



写真-12 大式三位の歌碑

有馬山 猪名（おな）の笹原
 風吹けば いでそよ人を
 忘れやはする



写真-13 西行法師の歌碑

冴る夜は よその空にぞ
 鴛鴦も鳴く 凍りにけりな
 昆陽の池水



写真-14 上島鬼貫の句碑

月なくて
 昼は霞むや
 こやの池

【参考資料】

- 1 『兵庫のため池誌』 兵庫県農林水産部農地整備課編 昭和 59 年 3 月
- 2 『兵庫の地質』 兵庫県土木地質図編纂委員会編 平成 8 年 3 月
- 3 『古代の猪名野』、『昆陽池・昆陽井』 伊丹市立博物館解説資料 平成 15 年
- 4 『行基と昆陽池』 伊丹市立博物館解説資料 昭和 63 年
- 5 『伊丹市水道ビジョン 2035』 伊丹市上下水道局 令和 8 年 2 月
<https://www.water.itami.hyogo.jp/material/files/group/101/itamishisuidoubijyonn2035.pdf>
- 6 『伊丹台地の史話と昔ばなし・第 3 集』 阪上太三 平成 14 年 7 月

※発行：平成 24（2012）年 3 月 『ひょうご水百景』 No.10

改訂：令和 8（2026）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.10